

「不朽の島」

エリザ・ルーアマー・シドモア 著
中川利國（広島市公文書館長） 訳

本稿は、コーネル大学図書館所蔵の「センチュリー・マガジン」(The Century Magazine) 誌⁽¹⁾ 一八九六（明治二九）年八月号に掲載された、米女性紀行作家エリザ・ルーアマー・シドモア (Eliza Ruhamah Scidmore) による宮島の紹介記事「不朽の島」⁽²⁾ “An Island Without Death” を仮訳したものである。

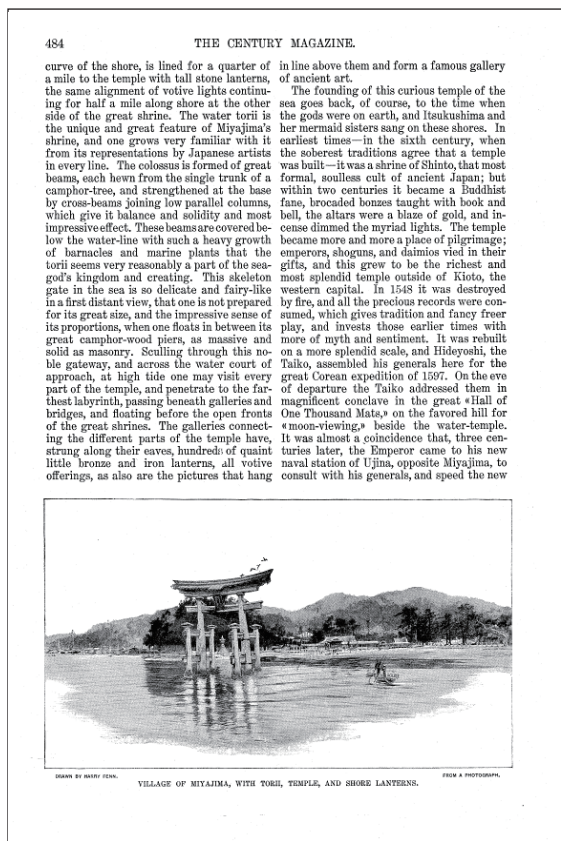
訳文中においては、原文中の《》は「」に、（ ）は（ ）に置き換えた。原文中の日本語アルファベット表記（地名を除く）は参考として初出の箇所に、ミで囲み、さらにイタリック体で表記されているものは原文と同様に表記した。（ ）は訳者が挿入した補記である。

*

*

「日本三景」のひとつ宮島は瀬戸内海にある神聖な島で、東日本の「松島の千松島」や西日本の奇妙に屈曲した半島「天橋立」よりも詩的で伝説にあふれ、人々の興味や連想をもたらす。日本三景は全て主要な観光ルートからかなり離れているので、長い間外国の旅行者により神聖さが損なわれたり、通俗化されたりすることもない。そして、熱心な参詣者や風景を愛でる人々を魅了してきた。宮島の木立からは今も参詣者の杖の音がもれ、水面に浮かぶ壮大な神社⁽³⁾の光は夜ごと水面で輝き、その周りには理想の日本である古よりの雰囲気漂っている。

地理的に宮島は瀬戸内海の中ほどにあり、屈曲した安芸地方の沿岸のかなり内側に位置するため、この魅力的な水域を通る大きな外洋蒸気船から観ることはできない。そこへ行くのに最適なルートは、古びた小さな港に何度も立ち寄るといふ例えのような航海ではあるが、大阪からの小さな沿岸航路の蒸気船を利用することである。到着間際にやっと、緑に覆われた山がちな島が姿を表し、うつそうと生い茂った木々のあちこちから、神社の屋根がのぞいている。そして、水面からそそり立つ壮大な鳥居 “torii” は、これまで死を寄せ付けたことのない理想の地にふさわしい門である。そこは信仰と風景の麗しさと、伝説と詩情が残る所であり、純朴な島民と温厚な年老いた神官や神々に守られ人々に愛され、人慣れした鹿たちの地であり、鉄道、議会、輸入された軍事戦術や最新の戦艦といったもので活気がある新しい日本とは異なる雰囲気を残している。あるいは、神戸から広島まで鉄道を使い、その後沿岸を十二マイル（約二〇 km）ほど人力車で走ってこの神聖な島まで狭い海峡を船で渡る、という方法もある。絵のように美しい広島城の天守閣のふもとや、一八九四（明治二七）年の勝利の年には朝鮮や中国への輸送船の出



Courtesy of Cornell University Library, Making of America Digital Collection

発港となった帝国の主要海軍基地——宇品で繰り広げられるラッパや行進、演習の喧騒から逃れてこの地に来ると、その純朴な島の印象はよけいに深まるばかりである。それ故、人々は宮島に伝わる伝説を受け入れることができるのだ。その伝説とは、イザナミの神の玉飾りが付いた矛から滴が落ちてそれから宮島が出来たという伝説、彼女らが自分たちの都合の良いようにうまく選んだのだが、海神の娘である市杵島姫命“*Itsukushima*”と彼女の二人の姉妹の伝説、彼女らの神社は海から現れて海上に浮かびあがったという伝説や、そして、水上の大鳥居がサンゴ礁のように自然に潮の満ち引きに合わせて成長したという伝説である。

緑に覆われた岸边のふもとに、小さな村があるのだが、そこはありふれた世俗さゆえに他とは隔絶されている。そして、神社は丘にぐるりと囲まれた湾の中に位置しており、その岸边と水上の前景に独特の特徴がある。その村の端の海岸沿いには、各梁や柱が一枚石の大島石“*Oshima granite*”でできた堂々とした鳥居⁽⁴⁾が建っており、聖地への入り口を表している。そして、海岸線に沿って湾曲した道は、神社までの四分の一マイル(約四〇〇m)ほど背の高い石灯籠の列で縁どられており、同じような献灯の列は神社の反対側に二分の一マイル(約八〇〇m)伸びている。水上の鳥居は、宮島の神社(厳島神社)の非常にユニークで大きな特徴であり、あらゆる分野の日本の芸術家の作品を通じて、よく知られるようになった。その巨大な構築物は、それぞれが一本のクスノキから切りだされた立派な梁で形作られ、バランスと補強のための平行な支柱が横桁で加えられて根元が強化されており、それが鳥居のバランスと堅固さを強化し、際立って印象深くしている。これらの柱の水中部分はフジボや海藻でびっしりと覆われているので、あたかも海神の王国や創造物の一部のようにみえる。この海上の骨組みだけの門は、その巨大な大きさや形の見事さを知らない者が遠くから眺めると、とても繊細で可愛く見えるが、巨大なクスノキの柱の間に小船で浮かんでみると、まるで石造建築物のように壮大で強固な印象である。この堂々とした門を潜ってこぎ進み、水上の中庭を社殿へと進んで行くと、迷路のさらに奥へと入って行き、

さらに、廻廊や橋の下を通り過ぎて、壮大な神社の開けた正面に浮かぶのだ。このように、満潮時には神社のあらゆる所を見ることが出来る。神社の各建物をつなぐ廻廊には、軒の下に何百もの青銅や鉄でできた奉納品である小さな灯籠が吊るされ、それらの上には絵馬が連なって飾られており、古美術の有名な画廊となっている。

この海上の興味深い神社の起源は、もちろん、まだ神々が地上にいて、市杵島姫と彼女の人の姉妹たちがこの浜辺で歌っていた頃にさかのぼる。初期の時代、厳密な伝承によると社殿建設の時期は六世紀であるが、あの最も厳格で無慈悲な日本の古来の宗教である神道の神社であったが、その後二世紀が過ぎる頃までには仏教の寺院となり、あてやかな着物の僧侶が仏典や鐘を携えて教えを説き、金色に輝く祭壇や灯明は、香の煙でかすんでいた。厳島神社が参詣の場所として盛んになるにつれ、天皇、将軍、そして大名たちが競って貢物をしたので、厳島は西の都である京都以外では、最も豊かで華麗な神社となった。一五四八(天文十七)年の火事で神社は消失し、全ての貴重な文書も失われたため、伝承や想像のなすがままとなり、初期の時代が神話や感傷に覆われたものになった。その後、この神社はより壮大に再建され、太閤秀吉は一五九七(慶長二)年の朝鮮出兵の際に、ここに武将たちを召集した。出発の前夜、太閤は「観月」の場所として気に入っていた水上の社殿のかたわらの丘、そこに建つ偉大な「千畳閣」で壮大な秘密会議を開いて彼らに演説をした。そして偶然にも三世紀の後に、天皇は宮島の対岸宇品の新しい海軍基地において将軍たちと会議を重ね、新しい艦隊を朝鮮の沿岸へと急がせて太閤のような勝利を何度ももたらした。

一八七一(明治四)年の純粋な神道の復活とともに、神社はあたかも火災で焼きつくされたように、徹底的に浄化された。壮麗で豪華なすべての仏教儀式は終焉を告げ、絶え間ない鐘や太鼓の音、僧侶の読経は途絶えた。そして、無数の灯明は消され、香炉、仏画、黄金の蓮の花、旗、垂れ幕、その他豪華な神社の装飾は投げ捨てられ、それとともに大勢の僧侶も追い払われた。たくさんの建物が破壊され、静かで空っぽの神社の中では、神鏡や御幣“*gohei*”といった神道の道具が、蓮の輝きに取って代わっている。略奪され

た寺院に残されたものといえば、信者が供えた米粒を探し回ってネズミが今なお出入りする大きな賽銭箱や、献灯用の宝珠“*luna*”をかたどった数台の燭台だけである。そして一八八七（明治二〇）年、再びの火災^⑤で、大規模な破壊がもたらされた。そして今やこの貴重な名残である寺院は大切に手入れされ、そして注意深く管理され、その保存は安芸地方全体の威信をかけて行われている。

木造の構造物は、硯を造る上質な石（赤間石）の橋脚の上に建てられており、主あるいは中心となる社殿と四つのより小さな社殿が長い廻廊と太鼓橋でつながれている。満潮の時は、神社はまさに海上に浮かんでいるように見え、穏やかな鏡のような水面には、上下逆さまになったもう一つ神社が現れる。干潮の時には、おそらく詩的な風情はほとんど無いが、それでもカニや海の見慣れない生物が岩をよじ登ったり、潮だまりで泳いだり、そして鹿が海上の中庭であつたところを気ままにうろついたりしている。そして人々は数時間前までは舟で移動していた中庭で、飛び石の上を渡ったりすることもできる。宮島には、独特の魅力が無いわけではない。

神社での現地の案内人たちは、たくさんの細かなことをひっきりなしに説明するのだ。「それぞれの柱の間には、八枚の床板を敷いています、隙間が大きく開けてあるので、いつも水面がのぞいています」、「この素晴らしい手水鉢は百年前に神社に寄贈されたものです」、「これらの石碑には、この神社に一〇〇円以上寄付をしてくださった皇子の方々の名前が刻まれています。」などと、彼らは説明した。案内人たちは、一八七三（明治六）年のウィーン万国博覧会において、古美術の展示として貸し出された、四世紀前の著名人の肖像画をまず最初に示しながら、奉納絵馬の廻廊でも興奮気味に説明する。他の何千余りの絵馬の中で、最も著名なものは（森）祖仙“*Sosen*”による、比類なくふわふわの毛の一匹の猿が、宮島の鹿の背に乗ったものだ。小さな目の良いお猿さん“*saru-san*”は、鹿が神社のどこへ行っても追っかけて行くのです、と案内人は言うのだ。次に人気のあるのは狩野ソザン“*Kano Sozan*”^⑥の忍び寄る虎の絵だ。しかし、冷酷な目で迫ってくる縞のあるネコ科の動物は、昔は熱心な参詣者を恐れさせるためのものとしてその高名さと

同様に偉大であるが、今日の近代的な動物園のあるような時代では参詣者を威圧することはない。左甚五郎“*Hidari Igoro*”という左利きの芸術家による二人の武者の彫刻と、この彫刻家の金字塔とも言える長い鼻の天狗の巨大な面がある。そのなかでも、（中井）藍江“*Ranku's*”による、筆と菊の花を手を持った穏やかな花絵師の老人の肖像画と、狩野“*Kano*”の富士山のボロボロになった絵は魅力的なものだ。少し変わったものとして二五〇年前に初めて長崎に来港したオランダ船の絵や、エッフェル塔の近代的な石版刷りの絵もある。広島市は巨大なブロンズの羅針盤を寄贈し、龍やちよう結びの形をした面白い大木の根が、九州からの参詣者によって神社に持ち込まれた。さらに、多くの揮毫や漢詩が扁額に飾られて、書道の素晴らしい手本となっている。

廻廊には、写真、貝殻、宮島土産やいろいろな鹿の餌を売る幸せな家族たちがいる。程度の差はあれ、この島に滞在する者は、滞在期間の長短に関わらず純朴な生活に染まってしまう。毎日は、次のようなちよつとした時間過ぎてゆく。明るく世間話好きな氏子仲間とその子供たちとの一時を過ごし、そして、雄鹿から小さな子鹿までの可愛いペットたちのために餅と饅頭を買うと、いつも鹿たちはみんな押し合いしあいして、手からそれらを食べる。そして、無視されると、大きくて優しい目でじっと見つめて懇願してくる。ある常連の老いた雄鹿は、朝の饅頭をもらうことが習慣になり、木造の廻廊の途中まで私たちを探して、パタパタと走り回るのが常だった。そして、そんなうるさい下駄“*geta*”（木靴）で、無分別にも神社の中に入る四足の遊び仲間に、子供たちは穏やかだが、きちんとやってきかせ、その雄鹿は、いつも「シート」と追い出されてうろたえるのだった。

厳島神社の年に一度の大祭は、毎年七月の陰暦六月十七日に催され、参詣者がどんな長旅を経ても十分に報われる水上の祭りである。神官たちは、他の祭りでは通りを引っ張られる山車に相当する三六槽の飾られた舟の列を率いる。小型船団を率いる巨大な船は、海上の中庭の端でこのとき以外は眠っているのだが、銅鑼を鳴らし、旗をなびかせ、囃し歌とともに鳥居を抜けて進むのだ。それらの不格好で素朴な船は、織の幕、帆、そしていくつもの提

灯によつて、豪華に飾られた屋台船に変わつてゐる。満潮時には、神社の中央舞台から海の宝珠が投げ入れられ、そして、それらの神聖な魔除けを取ろうと飛び込むのを待ちながら、宮島中がはしやぎまわつてゐる。夜には、神社の八百もの灯りや、浜辺を縁どつて長く湾曲した灯りの線が水面に炎を反射させ、それぞれの神社の内部はろうそくのピラミッドで輝き、水上の鳥居は、暗黒の空とキラキラと輝く海の間で炎の門と化してゐる。熱心な信者から十分な油が寄進されれば、いつでも神社や浜辺にある千もの灯明に火を灯すことが可能であり、鎮火祭⁹は満潮時にしなければならぬ様に、この年によつて開催日の変わる灯りの饗宴はしばしば真夜中に行われる。

神社のある入り江と、村や水辺の商業地とを隔てる緑の丘の頂には、太閤が大将たちに演説した広大な広間、「実際は九二〇畳ですが」と私たちの几帳面な案内人が言った「千畳閣」"Senjo Kaku"がある。土産物売りは商品台のかたわらに座り、子どもたちは広間を走つたり転げ回つたりしてゐる。そして、奉納された絵馬、ミニチュアの帆船や船乗りからの奉納品が上に飾られてゐる廻廊からは、対岸の山並みと瀬戸の素晴らしい景色が見渡せる。加えて、ここは「観月」の丘として有名であり、かの太閤が、銀色の笑顔の下弦のお月さんが木々の上に昇り、眼下の入り江の神社がさざ波を立てて、きらきらと輝く海の上を浮かんだり動いたりするように見えるまで、月を眺めたことで知られてゐる。そして、月見と厳肅な詩の朗読が、明治になつた近代でも毎月行われている丘でもある。薩摩の反乱で亡くなつた兵士たちの記念碑⁸がこの見晴らしの良い頂にあり、新しい日本と古い日本を結び付けてゐる。古風な趣のある古い五重塔は、積み重ねられた丹色の屋根が丘の木々を見事に引き分けてゐる。これは竹田番匠 "Takeda Banjo" の傑作であり、彼は海上の厳島神社の庇護者である足利將軍や北条將軍の大功(番匠)でもあつた。有名な宮島の千年松が最近枯れてしまつた。大きく枝を広げた姿はもう見られないが、村のあちこちの小さな店で、その枝や幹の中心から作られた土産物の杓子、箱や盆を買うことができる。

神社の背後の溪谷には、神官やその上位の神職の者が住む、孤立した貴族的な一角⁹がある。その溪谷の奥はもみじが豊かで、日本の美しい設えの中

でも最も魅惑的な小さな館―茶屋がひと固まりとなつてゐる。そこには、普通の大きな居間か家主の仕事場があり、そして名士のための一般的「賄い部屋」が道路側にある。しかし、門の内側には深い緑の溪谷―深さが十五フィート(四・五m)、幅がその二倍もある恐ろしく深い谷が、繊細で軽々としたもみじの枝で覆われている。山肌から、幅二フィート(六〇cm)ほどの激しい急流が流れ出て、木製の船型ソース入れのような小舟が一方につながれた、大型のダイニングテーブルほどの大きさの湖¹⁰に流れ込んでゐる。見晴らしのよい急斜面の上にはどこにも、一部屋、二部屋、又は三部屋ほどのちっぽけな家がある。華奢で精巧で小さな出窓、シミ一つ無い障子、柔らかくて輝きのある畳があるおもちゃのような住まい。不細工で美観を損ね、破壊的でもある海外生活の質素な身の回り品で、それらを台無しにしないかと躊躇してしまふ。そして、自分自身にとつてはそんな小型の屋敷に合わせようとする、小人の国に來たガリバーになるのだ。もみじ谷での私たちの生活は、朝に小さな峡谷や小さな湖がそこには無く夢だったかも知れないと心配しながら障子を開けた瞬間から、その代わりに夜中は巻き上げられてしまふ魅力的な日本式の垂れ幕が下ろされるのだが、夜に雨戸がぱたんと閉まるまで、興味の尽きないものだった。鹿とは、私たちが到着してすぐ友達になつた。玄関前の庭にある三フィート(九〇cm)平方ほどの中庭に、きれいな音色の噴水の水を飲みに来て、玄関ポーチの端でお行儀よく頭を上下に動かして鹿の餌をくれと訴える。この可愛い物乞いたちは、愛らしい目とすつきりした鼻筋、そして優美な脚を持ち、自分たちの魅力を知つてゐるよう人々を恐れない。彼らは、ほんの少しポーズをとるだけで、最も石のように冷たく感情の無い人の心でさえ動かして彼らの虜にしてしまふ。さらにもつとのどかに感じられるのは、早朝に何頭かの雄鹿や同じくらい警戒心のない雌鹿と小さな子鹿が、湖のそばで私たちの朝食を分けてもらおうと待つてゐるのを見つけた時である。宮島滞在の後、人が理想郷に暮らしたことを自慢するのはもつともなことだ。そして、日本でもとりわけ珍しい魅力を満喫すること、日ごとに素晴らしく感じられる毎日により生気を与えられるのだ。この島の平穏さはその信仰深さと同じくらい完璧であり、小さな魅力的な溪谷では、優

しく流れる川ともみじの葉が舞い落ちるわずかな音しか、聞こえてこない。

人々は、そんな完璧な美しさを持つ場所にふさわしく、やさしく話した。溪谷の向こうの小さな家々に隣人たちがやって来ても、彼らがそこにいるとわかるのは、竹のコップでできた灰皿にキセルをコツコツと当てる音が聞こえるからだ。ある日、茶の湯 “*cha-no-yu*” がせせらぎの上に建てられた三畳ほどの畳の茶席で開かれた。もみじの向こうに、五人の堂々として厳肅な茶人たちが、太閤の時代からの長く緊張した儀式に従って指を曲げ、掌を内外に回しているのが見えた。その茶の湯とその設えは、夢に見る理想の日本だった。鳥はしばしば、鹿のいる湖へ恐れもせず水を飲み飛んで来た。また別の日には、私たちは小さな出窓から、池の上の滑らかな銀色の流れ―「すべり滝」をさかのぼろうともがくカメを見て騒いだ。カメさん “*Kame-san*” 〈尊敬すべきカメ〉は、巨匠の描く「昇り龍」や「鯉の滝登り」のように、私たちに障害を越える粘り強さと人生における成功について、生きた手本となって感銘を与え元気づけてくれた。

そのような質素で人と人との関係が近い生活では、食事に何を食べているのかでさえ筒抜けであった。通りがかった村人たちは皆立ち止まって、私たちのコックが昼食用に濃い色のカレーを作っているのをじろじろ見ることもあった。茶屋の女中を誘いに来た派手な着物の行商人は、コックの作る奇妙な混ぜ合わせの料理をじっと見て、そして私たちが湖に面した小さなベランダでナイフとフォークを使ってごちそうをさばくの言い訳しながら見ていた。茶屋の小さな少年は、私たちの夕食の鶏を毎朝追いかけて笑わせてくれた。彼は、怒った鶏を湖の周りをぐるぐると追いかけ回し、鶏がコツコツと鳴きながら土手に飛び上がると、彼は手のひらで湖の水を捉えて素早く動かし、深い溪谷の水を空っぽにして、この溪谷の選りすぐりの点景物を台無しにするような勢いで、羽を逆立てた鶏に水しぶきを浴びせたものだった。茶屋の従業員たちが一斉に鶏にかかれば、召し使い頭が獲物を抱えてきて立派な「シチュー用の鶏」を見せてくれたのだった。宮島のニワトリの肉質は固く、普通に料理しただけでは柔らかくならない固い繊維があったので、ある日、鳥を関節ごとに、体は四分の一に切り分け、近場の小旅行に出かけているで

あろう三時間の間、それら全てを煮込むよう命じた。これで良いか確認してくれと呼ばれて行くと、最後の関節までバラバラにされた青白い調理されていない鶏があったが、バラバラになった部位は、全て元通りに奇麗にくつつけられ、細い木綿糸で細かい網状にぐるぐる巻きにされていた。それは、いつも我々自身と比較するガリバーの奇妙なパロディであった。

そこは、かつて車輪が走ったことも、土地が耕されたこともなく、宗教的な慣習が何世紀にもわたって死と生を禁じ、安芸の対岸までの渡し船の中で数多くの魂が、慌ただしくこの世に生まれ、またこの世を去ろうとするような奇妙な小さな村である。対岸の安芸の丘陵の切れ目にある大野 “*Ono*” という小さな村には、島の火葬場や、代々の宮島の人たちが眠る墓所と小さな草ぶきの小屋が見えるが、その小屋は、赤ん坊が偉大な神社へ最初の祝いの儀式で参生後三〇日が来るまで、宮島の母親たちが留まる場所である。

彼らは、とても親切な村民であり漁民であったため、私たちはすぐにその隣人たちと親しくなり、ある年配の船頭 “*sendo*” と彼の息子たちが私たちの日々のお伴となった。彼らは、どこに案内すれば朝方に最高に美しく入り組



the night of the great «September moon-viewing» the *sendo* took us far down the shore at sunset, letting us see two of the ten forts of the island's defenses, their port-holes and casements masked in foliage, and looking innocently down upon the narrow, tide-swept strait that commands one entrance to Ujina. Incoming junks seemed to reef their sails purposely for us, fishermen cast and drew their nets, and all of picturesque water-life showed until dusk. There was only a little time of darkening grayness and real night before a pale effulgence showed behind the heights, and O'Chiku San rose, tangled herself in a pine-tree's branches, soared clear for a while as she turned the whole bay, the temple, and the torii to silver, and then, like a true Japanese moon, barred herself across with narrow cloud-lands. There were quiet groups and solitary souls muttering under the breath on the hill beside the Taiko's hall, and looking down upon the temple, which seemed to be truly floating on a full-flowing silver sea; every court was a shining space, and no sound was heard save the distant hand-strokes of those praying before the shrines. From this vision of enchantment we went by shadowy streets to our maple-leaf home, where the witchery of moonlight filled the little glen with more of fairy-land than ever. At our doorway a little altar-table had been placed, and two plates of the rice-dumplings symbolic of abundance and prosperity, and a vase of *Les-pedeez* and the early «autumn weeds», illuminated by the flame of a tiny wick laid over the edge of a saucer of oil, were set in silent offerings to O'Chiku San. A deer stood back in the shadows, gazing with shining eyes at this eloquent offering, but nothing disturbed the homely altar until dawn showed the saucer burned dry of its oil, and the greatest moon-festival of the year was over. There are small «deer» on the island that arouse no poetry or gracious sentiments. The mice, those pests of Japanese tea-houses, raced through the doll-houses at will by dark, the ornamental traceries and designs pierced in the pretty wood panels above the screens giving them free range of every room. They ran over my face, scratched my pillow, nib-

んだ岩の多い磯が見られるか知っており、平底船をこいで洞穴やトンネルを通り、魅力的な絵をはめ込んだようなアーチ型の岩を潜った。私たちは、壮大な鳥居の周りを舟で浮かぶことに飽きることはなかった。むしろ、その魅力は日増しに強くなった。宮島の腕白坊主たちは、小さなコインを拾おうと絶え間なく飛び込んだり、水しぶきを揚げたりして私たちの周りで大騒ぎをした。私たちの平底船は、このような明るくうれしそうな顔の元気に日焼けしたカエルたちに囲まれた。「中秋の名月」の夜、船頭は私たちを日没に海岸からかなり離れたところへ連れて行き、島の防御のために十か所ある要塞のうちの二か所を見せた。砲門と砲郭は枝葉で覆われており、何食わぬ顔で宇品への入り口に臨む狭くて潮の速い海峡を見下ろしていた。入ってくる帆かけ船が、わざわざ私たちのために帆を縮めてくれたようで、漁師たちは網を投げては引き寄せてと、絵のように美しい水辺の生活が夕暮れまで繰り広げられた。薄暗がりや本当の闇となる時間はほんの僅かであり、高台から青白い光が現れるとお月さん「O Chiku San」が松の枝から見え隠れしながら湾全体、神社、そして鳥居を銀色に輝かせ、しばらくの間は何かに遮られることもなく昇っていったが、やがて、狭い雲の帯の後ろに姿を隠し、まさに日本の月といったようになった。太閤の間（千畳閣）の近くの丘には、眼下に豊かに流れる銀色の海に本当に浮かんでいるように見える神社を見下ろしながら黙り込んだ集団や、一人でブツブツとつぶやいている人々がいた。どの中庭も輝く空間となり、遠くの神社で柏手を打つ音以外何も聞こえなかった。この魅惑の光景から、陰になっている小路のそばを通ってもみじの家に帰ったが、そこでは月の光の魔法が小さな峡谷を一層おとぎの国にしていた。私たちの茶屋の戸口には、小さな祭壇が設けられ、豊作と繁栄を表す団子が乗った皿が二皿と、萩と「秋の野草」が挿してある花瓶が油皿に浸した灯芯の小さな炎で照らされて、静かにお月さんに奉げられていた。一頭の鹿が月影の奥に立ち、見事な奉げものを、輝く目でじっと見つめているが、その家庭的な祭壇は、夜明けになって小皿の油が燃えつきるまで、そのままに置かれていた。こうして今年の素晴らしい月の祝祭が終わった。

この島には、何の詩情も優雅さも感じさせない小さな「鹿」がいる。日本

の茶屋の害獣であるネズミは、暗くなると小さな家を我が物顔に走り回り、障子の上の装飾の透かし彫りでネズミたちは自由に部屋を行き来した。彼らは私の顔の上を走り抜け、枕を引っ掻き、指をかじり、そしてカサカサと音を立てたりガリガリかじったりして、毎夜眠らせてくれなかった。ネズミたちのお祭りの三日目、私は使用人を呼んで明かりを持ってこさせた。家主が聞きつけて何事かと中庭を慌ただしくやって来た。「この家にはネズミがいるわ」と私は訴えた。「ええ、もちろんです、もちろんです、お嬢さま」と、彼は深くお辞儀をして誇らしげに言った。「はい、確かに。いっぱい、たくさん」の野ネズミがこのモミジにいます。」そして、何故そんな当たり前の事で面倒を起こして、豊かな繁栄の証拠であり、豊穡の神―大黒さんのお付きでもあるネズミたちを邪険にして騒いでいるのか、彼にはまったく理解できなかった。

ある、まどろむ様な午後、村のお触れ役人が戸口に来て拍子木を鳴らし、その日から五日間続けて二時から寺で開かれる、朝鮮の軍隊からの公式発表の「報告会」を聞くよう宮島中の人々に大声で繰り返しふれまわった。私たちは代理を聞きに行かせるかと、変わり者の犬塚がたった一人で息切れして帰ってきて、興奮しながら日本語や英語や何かわからない言葉で、平壤での勝利⁽¹⁾を伝えた。私たちは以前からずっと、私たちの理想郷滞在の終わりにふさわしいお別れの奉げものとして、灯明を神社へ奉げようと思っていた。これは絶好の機会だった。すぐに犬塚は急いで神社へ戻り、位の高い神官に直ちに千個の灯明の油皿に油を満たし、夜中の満潮を待たずに夕暮れ直ぐからその灯明を点けるよう嘆願した。神官たちは、そのような変則で古からの習慣を無視するような急な申し入れはできない、と首を振った。「しかしこれはアメリカ式の祭りで、平壤を祝するためなのです。こんな灯明に、習慣があるなんて言えますね。今まで、朝鮮の戦いに勝利した時には、どの汐で灯明を灯したのですか。」そして、偉い神官が言った。「たしかに、たしかに。よし、米国“Beikoku”と平壤のためにやりましょう。」そして、興奮しながらも、じっと見ていた他の神官たちも、準備を始めようと喜んで飛んで行った。

うれしそうな私たちの船頭は、日没前にいつものように平底船で神社の階

段のところをいたが、戦いの勝利と名誉の灯明の二つの知らせを聞いて村が熱狂していることを話してくれて、それからようやく船をこぎ出した。私たちは、信徒が海岸沿いの至る所で背の高い石灯籠に油と灯芯を入れ、真新しい紙を張るのを見ることができた。そして、日没からしばらくして船で戻ってくると、灯りが神社の軒の下できらめき始めていた。一つの提灯が、水際に沿って進んでは、ちよつと立ち止まり、二つ目の灯りが前に進んで、三つ目、四つ目と、点灯夫の動きとともに岸辺に沿って進んでいった。やがて湾の突端から突端までの湾曲した入り江の全体は、私たちに向かって波間で長く反射しながらゆらゆらと二重に輝く、生き生きとした灯りで縁取られた。そして、神社は巨大な仕掛花火の一部のようだった。それぞれの神社は宝石のピラミッドのような奉納されたりそくで、太陽の女神の輝く洞窟のようだった。その見事な光景は、一時間以上も最高の輝きを続けた。村人はこの素晴らしい光景を見ようと岸辺に群がったり、神社の廻廊をぞろぞろと歩いたり、小舟で漂うものもいた。そうして、灯りはそこゝで消え、昇る月の光が空を青白くした。しかし、海辺が真つ暗になってしまっても、海辺にある厳島神社の奥側の社殿は奉納された灯りでまだなお輝いていた。

要塞から「報告会」に参加した二人の兵士は、灯明の計画を聞いてその場に残っていた。私たちは神社の舞台を歩いている彼らに気付き、灯りが灯された時に岸まで舟を戻して、もしよければ一緒に乗って海から灯りを見ないかと声をかけた。何度もお辞儀をして感謝を表し、彼らは平底船に飛び乗った。しかしながら、それは私たちにとても都合で、私たちは通訳を介して彼らに多くの質問を浴びせた。この師団の二人の兵士はようやく兵役を終え、勤勉な一市民として結婚して身を落ちつけようとしたところで、今度は予備役として召集されて広島へ出頭したのだ。彼らはこの島の要塞に派遣されたが、朝鮮での戦争に加わることを熱望しており、今すぐにでも、宇品からの乗船命令が出ることを期待していた。彼らのような予備役には政府から月に二円が支払われ、皇軍として兵役中に死亡した場合には彼らの妻に恩給が支払われ、そして、兵役中には家族に食糧配給も行われた。彼らは、朝鮮へ派遣されそうな全ての兵士たちには借金の支払猶予が与えられる事や、若い兵

士たちが八時までに兵舎に帰らなければならないのに、彼らのような予備役がどうやって十一時まで兵舎に戻らなくてすむのかを話してくれた。私たちが心配して、門限を過ぎて兵舎に戻るとどうなるのか尋ねると、彼らは「自分たちの上司は、自分たちを罰したりしません。上司は、自分たちが清兵のように、夜中に逃げ出すのを恐れることはありません。自分たちはただ、お寺に残って平壤の知らせを聞いていて、その祝賀の灯明を眺めていたと報告すれば大丈夫です。」と答えてくれた。

彼らの望みは、早く宇品の輸送船に召集されたいということに集中していた。船頭が私たちを乗せて大鳥居の下を潜ろうとした時に、私は別の列に座っている兵士に、試しにこう言ってみた。「さあ、この鳥居の下にいる間に神々に祈れば、彼らはあなた方をすぐに朝鮮へ送り、勝利をもたらしてくれますよ。」すると何の反論や返答もなく素早く自然に、そしてとても真剣に二人の兵士は立ち上がって柏手を打ち、しばらくの間頭を下げて祈った。その間、小舟は巨大な影の下で静かに浮かび、船頭は櫓のかたわらでじつと佇んでいた。

翌朝、村の役人たちが、日本の勝利を祝おうとする「あなたがたの心意気に感謝する」と言いに立ち寄った。位の高い神官がお米の詰まった熨斗紙を贈ってきてフルネームで芳名を尋ねたが、多分、それらは神社の寄進者に加えられるのだろう。そして私たちが村へ行くと、会う人だれもおじぎをしてアメリカ版の祭りについて素敵な言葉をかけてくれた。数週間後、東京の芸術家から私が「神社に好意として多額の寄付をしたこと、戦争のために祈ったこと、戦争のために宮島を何千もの灯りで彩ったことを聞いたし、そのことを日本の新聞で見ました」⁽¹²⁾と奇妙な言い回しで手紙を寄こした。まさか、四円（アメリカ金貨で二ドル）の支出で、このような喜びと栄光が得られるとは。

宮島での正しい巡礼には、島にある七つの小社巡りや、水上の神社からは二〇〇〇フィート（約六〇〇m）高い急な山頂にある「奥の院」への登山も含まれる。険しい石畳の小道と長く苔で覆われた階段は、森の中へと二マイ

ル(約三・二km)にもおよび、閉ざされて空っぽの、もしくは半壊した寺院、古い仏塔、荒廃した寺院や、他の多くの神聖な建物の礎のかたわらを通る。これらの建物は、仏教を禁止して純粋な神道を再興させて僧侶たちを追いやり、まさに文字通りの貧困と屈辱と不本意な断食に追い込んだ時に、理不尽に破壊されたものである。小さなお堂があらこちにあり、岩の下の大きな割れ目に、祈りの石塚がかたわらに置かれたお地藏さん“Jizo San”を祭る小さな祠がある。苔むした仏たちは、魅力的な隠れ家で瞑想している。そして、シダで飾られた湧水のかたわらでは、一体の夢うつつの表情の湿った像が、信心深い人々が拝んで、柄杓の水を苔の生えた頭にかけてくれるのを待っている。

道の中間地点にある休憩所には空っぽの寺院が集まっていて、風通しのよい「立場茶屋」“Ia-te-ba”が断崖の端にある。ほとんど真下には、神社、水上の骨組みだけの門、そして、真つ青な海峡と湾、広大な緑の安芸の丘陵の稜線を見ることが出来る。私たちは、小枝と薪の大きな束を頭の上に乗せて道を下る可愛い村の女中たちや、杖を持ち麦藁の蓑を羽織る静かな参詣者、そして上流階級の魅力的な一人の日本人女性に出会った。その女性は私たちの後ろから可愛く柔らかな声で、そのような粗くて崩れやすい花崗岩の坂道を堅い踵の革靴で登るのは危ないと、声をかけてくれたのだが、それよりも私たちは彼女がつま先を柔らかな紐で引っかけただけの藁草履で、どうやって危ない所を通って来たのか不思議だった。

宮島を造った神々は、家ほどの大きさの岩を傾けたり転がしたり、自然の鳥居を造ったり、岩屋や壁がんと造ったりと、頂上にある大きな岩を使って、いくつか力まかせの悪ふざけをした。そしてそれらは、いくつかの金箔を貼った像と金欄の幕によって、完全なお寺のようになっていた。私たちの年配いた案内人は、神社のようなところそれぞれで、私たちをしっかりと監視し、祭壇にある魅力的で小さな仏像が盗まれるのを防ぐかのように、私たちが賽銭の銅貨を投げ入れるや否や、彼よりも先に進むように急ぎ立てた。ある岩にはその横に穴が空いており、指を入れるととても濃い塩水に浸かるという不思議な岩もある。山頂部の頂にある近代的な探照灯は、灰色の風雪にさらさ

れた徳川將軍によって建てられた小さな神社で囲まれていて、そして、さらにここで私たちは、やせてはげ頭の年老いた案内人が、それぞれの神社で私たちが投げ入れるや否や銅貨の賽銭を盗んでいたことに気付いた。そしてそれが、私が彼の写真を撮る際にお天道様“Tento Sama”が照ってくれるよう柏手を打って祈ってくれと頼んだ時に、彼がほくそ笑んだ理由の一部であったのだろうし、私たちを彼より先に追いやった理由でもあったのだろう。

山頂は太陽の光と魔法のような静寂であふれていた。雉がかさかさ歩く音や、昼寝のためにシダの寝床を探す鹿が動く音——私たちが寂れた寺院、苔の生えた門、鐘楼などを順に訪れた時には、そんな音だけが聞こえてきた。人々は最近大きな寺を修復したが、そこでは、対岸の四国で龍を退治した弘法大師によって灯された神聖な火を燃やしている。そして、私たちに麦茶を振る舞ってくれた僧侶たちは、海の宝珠を盗んでこの寺に持ってきたカラスが、群れになって原始的な文字を形作っている護符をお守りとして売ってくれた。神々はこのカラスたちへの褒美として、カラスの子孫が毎年ここへ来て、安全に子を育てて巣立たせることを許したが、一年にたった二羽のカラスのみとした。頂や開けた場所ならどこでも、私たちは島の両側を眺めることができ、どこでも下方には素晴らしいうねった塊のような緑の木々が見え、遠くには繊細で霞のかかった青い山が、美しい空の色とも違う淡い真珠色と青色の海の上に浮かんでいた。

私たちは、自分たちの単調な外の世界へ洩々と戻った。この祝福された島を去るのはとても悲しい。そこでは、死や悲しみがほとんど取りはらわれたことから、たくさんある寺社に墓はなく、平穏と詩情があふれ、まるで進歩的な近代の日本から一世紀さかのぼったように感じる。人々は、封建的で信心深い時代や、また神々がもつと地上に近く、宮島を住む場所ではないとしても、訪れる場所にした時代の魅力を楽しむだろう。

我もかつて、理想郷に在りし。“Et ego in Arcadia vixi.”

エリザ・ルーアマー・シドモア

＊

＊

本稿は、シドモアの「不朽の島」を本紀要において紹介するにあたり、仮訳したものである。本稿を作成するにあたり、広島市立大学渡辺智恵准教授に訳文の指導を仰ぎ、ご多忙の中ご指導いただいたことに多大なる感謝を表すものである。拙訳中になお問題があれば、全て訳者の責によるものである。また、原文末には、ウッドベリー (George E. Woodberry) の短い詩編 (*The Silence of Love*) が添えられているが、訳出はしていない。さらに、原文の語句により、一部不適当な表現も使用している。

なお、本稿の訳出にあたり本館松本優希が下訳等の作業を行った。

註

- (1) Scidmore, Eliza R. "An Island Without Death" *The Century Magazine*, Aug. 1896. Web. MAKING of AMERICA. Cornell University Library. n.d. Web. 1 Jun. 2011.
- (2) 「不朽の島」は、『芸備日日新聞』明治二十九年九月二十九日号で、シドモアの記事を紹介する際に付けられた翻訳タイトル。
- (3) 原文では、「神社」も「寺院」と表記されているため、訳者が原文の文脈の中で適宜、訳語をあてはめた。
- (4) 御笠浜の石大鳥居と思われる。
- (5) 明治二〇（一八八七）年の大聖院本坊の火災と思われる。
- (6) ソザンという雅号の狩野派の絵師は、筆者が調査した範囲内では確認できなかったが、前後の文脈から、案内人が探幽を読み違えた可能性もあると考えている。
- (7) 原文中の "fire-prayer" を「鎮火祭」とした。
- (8) 「広島県壮兵殉難碑」と思われる。
- (9) 滝町の社家

- (10) 「湖」は溪谷の途中の池のような場所と思われる。
- (11) 明治二七（一八九四）年九月十六日の平壤陥落と思われる。
（表現として間違った）「奇妙な言い回し」と解し、訳もそれに沿った。原文 "I seen it in our Japanese newspaper"
- (12)